

令和元年度根本正顕彰会総会報告 <令和元年5月19日(日)>

【総会】



(挨拶する小林茂雄会長)

5月19日(日)、那珂市中央公民館において、先崎光市長、遠藤実県会議員を来賓に迎えて37名の会員が出席し、総会が開催された。平成30年度事業報告・決算報告および令和元年度事業計画案・予算案は、慎重審議の結果すべて承認され(別添資料参照)、令和時代の活動の幕が開けられた。顕彰会としては、これまで長年大いなる活躍をなされてきた会員も、高齢化を迎えて退会される方も増え全体の会員数が減少しつつある。今後ますます深刻さを増すことは大きな懸念である。

そのような中、情熱を持って几帳面な会運営を進めてきた小林茂雄会長が勇退し、増子輝雄副会長が新会長に就任した。小林茂雄前会長の功績に敬意と感謝を捧げつつ、会活動は、これまでの主要な事業を柱に据えて、それらの更なる充実発展を期していく覚悟を新たにしたところである。

その他、役員改選では理事の鈴木正矩氏、監事の武藤正夫氏が勇退、監事の桐原英雄氏は先頃逝去なされた。ご冥福をお祈りする。代わって新副会長に根本正治氏、理事に小堀優・勝山昇の両氏、監事に海野宏幸・鈴木正矩の両氏がそれぞれ就任した。

根本正翁の精神は、実際にはまだまだ広まってははいない。しかし、那珂市の教育に具体性を持たせようと、市の教育委員会は根本正の生き方を根本に据えて生徒たちの指導を行う方針を確立している。我々も、将来を担う子供たちを心身ともに逞しく育てるべく共に奮闘することを肝に銘じたい。



(退任者)



(新任者)

<小林茂雄会長あいさつ>

平成が終わって新たな令和の時代が始まった。根本正顕彰会も、これまで以上の大きな影響力をもった活動を進めていかなければならない。そのためにも、会員も一層の努力をしていかなければならない。本日は、今年度の会活動を左右する重要な事業案を上程している。慎重な審議をお願いしたい。

(毎年のことながら、根本正先生の生家を守る根本喜代寿さまから参加者全員へのお茶のご芳志を頂戴しています。熱くお礼申し上げます。)

<先崎 光市長あいさつ>



根本正顕彰会は、社会活動のほかに小・中学校などへ向けてもこれまでも多くの試みをなされ、大きな影響を与えてきた。今や人生100年時代、いつまでも好奇心を持って歩むことが重要である。さらには、会活動および根本正先生の精神について、もっと子どもたち・若い世代に関心を持ってもらいたいし、持つように努めていきたいものである。

那珂市でも、郷土に誇りを持ち、郷土や世界をリードするような子ども育てようと「子ども大学」が発足した。自分も生涯学習課に「早い時期に気づきを、チャンスを与える、その大事な使命のあることを自覚して欲しい」と訴えている。ともかく身近なところから始めようではないか、人間の飽く

なき知的好奇心に期待したい。

<遠藤 実県会議員あいさつ>

県議会の中では防災環境部会で活動している。世界的規模で最大の社会奉仕団はライオンズクラブである。その中の一つ那珂ライオンズクラブにも所属しているが、民間で学校の中で話ができる唯一の団体でもある。現在は、青少年を対象に薬物乱用防止活動に力を入れている。中学生には、「タバコは薬物への一歩である」と厳しく警告している。根本正先生の教えそのものである。子どもたちを啓発していくことは、大人の大事な責任である。薬物使用は意外と進んでいることを認識してほしい。根本正顕彰会などの「顕彰」とは、「今の時代にそれをいかに生かしていくか」である。ともどもに頑張ってもらいたい。



【公開講演会】

講師 増子輝雄新会長

テーマ 「根本正と学生野球」



増子輝雄新会長の講演には多くの地元支援者も参加され、70名を超える大盛況となった。

前半は根本正翁の生涯の中でも「義務教育無償化法」「未成年者禁酒禁煙法」の成立への苦闘をたどり、青少年健全育成への情熱を説いた。

後半は、「甲子園」が代名詞となった高校野球、高校野球選手の誰もが目指す甲子園出場、それが、せっかく甲子園出場を果たしながら戦時体制下の事情で記録に残らない不運な大会となってしまった水戸商業高校野球部、いわゆる「幻の甲子園」となってしまった背景を熱く語った。



このテーマは、根本正が米国に渡って苦学力行し、帰国後に政治生命をかけた青少年健全育成と、明治の日本が米国から始まった野球の魅力は早くから採り入れて健全な青少年を育成しようとした姿勢と共通するものでもあるとの視点から採られたものである。根本

(講演会会場)

正が「野球」をどのようにとらえていたかを示す具体的な資料は見い出せないが、10年間の米国滞在中には必ずや触れていると考えられるし、観戦の有無は別にしてもスポーツ・野球の雰囲気には触れていたものと考えられる。

根本正を研究していく上で、視野を広げて何らかの接点を求めて翁の生涯の周辺を追うことも、今後の顕彰会の在り方を考える上で大切な事ではないかとする増子新会長の発想から生まれた講演会でもあった。

《要旨》

<根本正>

教育観の根底には以下がある

- ① 「教育を平等に受けることのできる環境整備を」がある。
- ② 教育の在り方は自己の飽くなき探求心と強靱な忍耐力・実践力を求め、
- ③ 教育を与える父母および国家および社会の強い責任感を求めたい。

未成年者飲酒禁止法案の審議も孤軍奮闘

明治34年2月から大正11年3月まで19議会のうち前半6議会は共同提案。その後の10回が根本正単独提案：強靱な奮闘ぶりを窺うことができる。後半4回は共同提案である。途中の根本正の粘り強い行動がなければ成立に及ばなかった。

<学生野球> 一 忘れられない語り草の「幻の甲子園」一

明治4年(1871)、お雇い外国人教師米国人ホーレス・ウイルソンがもたらす

明治9年、開成学校チームと外国人チームの対戦開催(開成チーム敗る)

明治19年(1886)、尋常中学・高等中学に分かれ高等中学校は野球の対外試合推進

明治20年、水戸尋常中学校(現水戸一高)で野球始まる

明治37年、茨城県下初の中学校野球大会

大正4年(1915)、朝日新聞社主催全国中等学校優勝野球大会

大正13年(1924)、阪神電鉄によって「甲子園球場」創設「甲子園へ」が合言葉となる

昭和17年(1942)、戦意高揚を図る目的で大日本学徒体育振興会主催の全国大会となり、

従来からの中等学校野球大会(甲子園大会)は記録から外され記録から外され「幻の甲子園」となった。この時県下無敵、関東大会を制した水戸商業高等学校は優勝候補に挙げられたほどの強力チームであった。(同じく優勝候補の徳島商業に敗れる)

近年の水商野球部の活躍はめざましく甲子園出場はもちろん準優勝も達成、その応援隊長を務めた同校OBでもある増子会長の母校愛が会場全体に溢れ漲っていた。